

- 1 派遣期日 令和5年 8月10日(木) ～ 8月10日(木)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 筑波大附属小学校  
所在地 東京都文京区大塚3-29-1  
<http://kokugokyouiku86@gmail.com>
- 3 研修内容

#### 研究テーマ

豊かな言語生活を拓く国語教育の創造  
ー「言葉の学び」への自覚が育つ単元学習の開発ー

【基調提案】日本国語教育学会研究部長 藤森 裕治先生  
テーマ 子どもとともに在る教師の身体を考える  
「言葉の学び」への自覚が育つ学室

今大会の研究テーマ「豊かな言語生活を拓く国語教育の創造」は、言語生活者として学習者が言葉の学びへの自覚をもって生きるための構造として、学習論モデル(4CHモデル)が提示された。

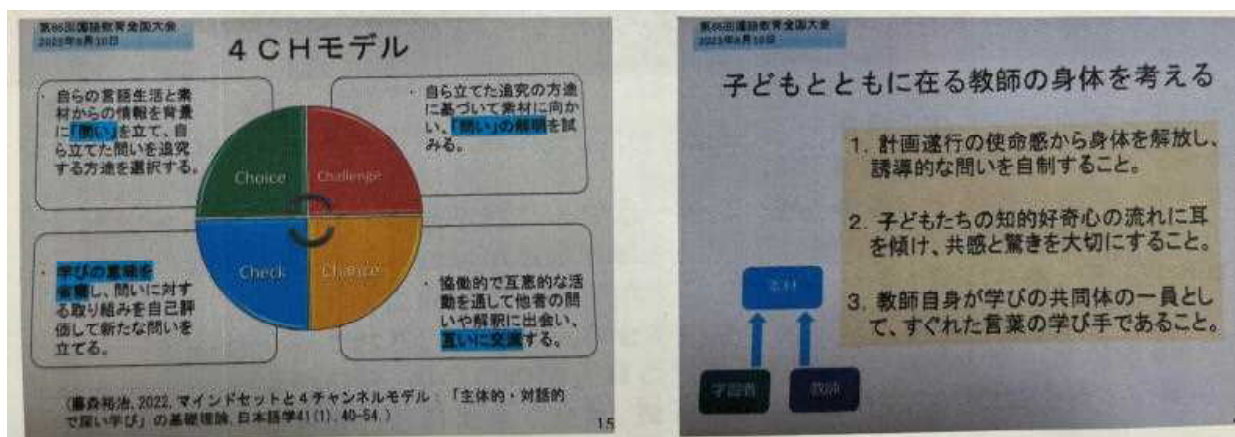
選択(Choice)：学習者から自ら問いを立て、学び方や学習材を選ぶ局面。学びの主人公が学習者となる局面。

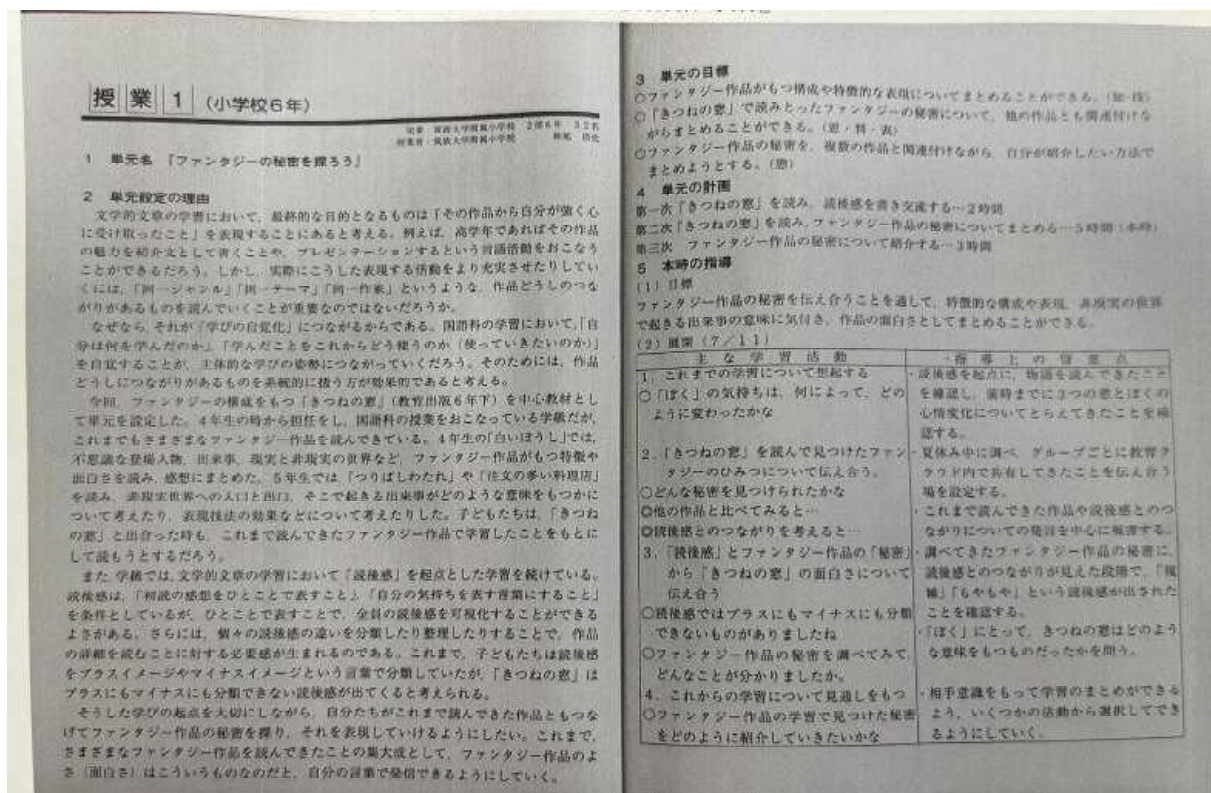
挑戦(Challenge)：学習者が失敗を怖れずに、自ら選択した学びに向かう局面。絶え間ない試行錯誤への挑戦こそ、保幼小中高を貫く学びの基本。

体験(Chance)：学習者が他者と交流し、さまざまな見方・考え方や出来事に出会う局面。他者の声と出会う中で、学習者は社会的な存在として成長していく。

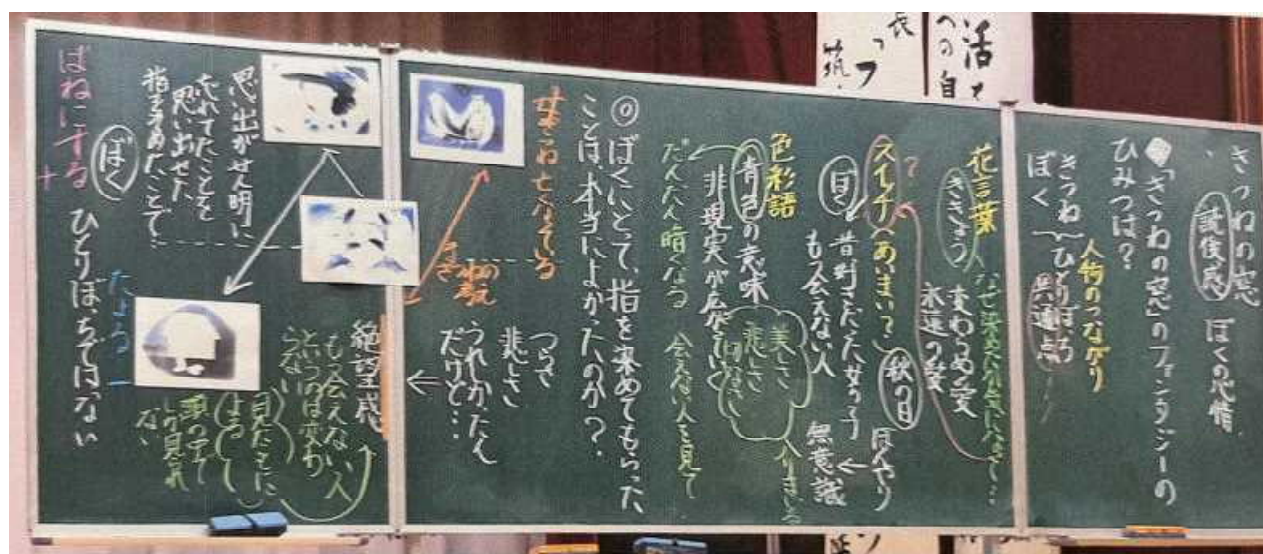
省察(Check)：学習者が体験の意味を省察し、次なる学びを展望する局面。何がわかり、できるようになったか、何がまだそうっていないかを、学習者自らが言葉にし、新たな学びへとつなげる局面。

このモデルを踏まえて、教師と学習者とは協働の問題探求者、すなわち同じ地平に立つ学習主体として材に向かう関係性を表す。教師は学習者の学びを管理者・支援者という立場から見下ろすのではなく、学習者の範となる言葉の学び手として学室に存在し、子供たちとともに、または伴走者として生きるような関係性が望ましい。





「第86回 国語教育全国大会 研究授業指導案」



「授業の板書構成」

#### 4 感想

文学的文章の学習において「読後感」を起点とした学習を進められていた。読後感とは、「初読の感想をひとことで表すこと」で、自分の気持ちを表す言葉にすることを条件とし、全員の読後感を可視化していた。そのことで、個々の読後感の違いを分類したり整理したりすることができ、作品の詳細を読むことに対する必要感が生まれるとともに、子供たちで交流したり問題意識をもって学習に取り組むことができるのだと感じた。

今回参観させていただいた授業は、「きつねの窓」で読みとったファンタジー作品の秘密について、児童が事前にまとめたものを伝え合うという活動内容だった。教師は児童の話をつなぎ、考えを板書する。「どんな秘密を見付けられたか」などの視点をしっかり提示することで、児童の考えが広がりすぎることなく授業が進んでいった。

授業を進めるにあたり、児童が根拠をもって説明することや、友達との交流をすることなど意識的に行い、教師は児童の意見をつなげるよう教材研究をしっかりと行っていきたい。